Costume and Textile

No.21 服飾文化学会会報 2011年3月

事務局移転のお知らせ

本学会は事務局を2006年度より共立女子大学内に置き、運営と活動を続けてまいりましたが、2011年（平成23）年４月１日よりお茶の水女子大学内へ事務局を移転いたします。よろしくご確認下さいますようお願い申し上げます。

服飾文化学会事務局
〒112‐8610　東京都文京区大塚2-1-1
お茶の水女子大学 人間生活学科 徳井研究室
TEL：03-5978-5802
Email：tokui.yoshiko@ocha.ac.jp

2011（平成23）年度　第12回服飾文化学会総会・大会のお知らせ

会員の皆様へは既にお知らせをお送りしましたように、2011（平成23）年度　第12回総会・大会を下記のように開催いたします。多くの皆様がご参加下さいますようご案内申し上げます。

記

開催日　2011年５月21日(土)・22日(日)
開催校　実践女子大学　日野キャンパス
〒191-8510　東京都日野市大坂上4-1-1
【研究発表】本館４階
【見学会】昨年同様、学会としての見学会を予定しませんが、大会校周辺の情報をご案内する予定です。

１．プログラム

５月21日(土)
13：30〜15：30　研究発表
15：50〜17：20　特別講演
演題　「下着」へのこだわりの心理学的背景
講師　菅原　健介　氏
（聖心女子大学文学部教授）
17：30〜18：00　総会
18：10〜19：40　懇親会
（大学第４館食堂）

５月22日(日)
９：30〜11：30　研究発表
11：50〜12：50　昼食
13：00〜14：00　展示発表、ショートスピーチ
（※展示は、5/21-13：30〜5/22-12：50）

２．参加費

大会参加費	会員	3,000円
	非会員	4,000円
	学生会員	1,000円
	学生非会員	1,500円
懇親会費	会員	4,500円
	非会員	5,000円
	学生会員	2,500円
	学生非会員	3,000円
昼食代（5/22）		1,050円

３．発表・参加申込

(1)　発表申込締め切り日　2011年３月31日（木）
(2)　要旨原稿締め切り日　2011年４月30日（土）
（提出先：takabu-hiroko@jissen.ac.jp）
①用紙：Ａ４縦置き、横書、1枚
②余白：上25mm、下30mm、左右30mm
③文字：10.5ポイント、明朝体
(3)　参加申込・払込締め切り日
2011年４月25日（月）

郵便振替口座番号：00220-4-116674
加入者名：服飾文化学会第12回総・大会実行委員会

4．特別講演について

◆菅原健介氏　講演要旨

「下着」へのこだわりの心理学的背景

通常、他者の目に触れることのない下着であるが、近年、色彩やデザインの多様化など、下着への関心やこだわりの強さを示す現象が目立つようになってきた。体型への物理的なフィッティングを最優先させてきた下着業界が戸惑いを覚える中、筆者らはワコール㈱と下着への関心の心の背景を心理学の視点から分析する共同研究プロジェクトを立ち上げ、10代から70代の女性を対象に複数の調査を行いながら研究を進めてきた。当日は、その概要について報告させていただきたい。主な内容は以下の通りである。

ひとつは、下着へのこだわりの心理的背景についての知見である。下着にこだわる理由として、「アピール」「気合」「安心感」という３つの心理的効用感が見出され、それぞれが下着の「デザイン」や「補整性」などの特徴と結びついていた。さらに、これらは、いずれも自己顕示欲求と強い関連性が認められた。個人が自己の存在をアピールするためには、アピールする内容（コンテンツ）と、動機付け、さらには不安や気おくれ感の払拭が必要であるが、これらのための資源を下着が提供している様子がうかがえた。

ふたつめは、いわゆる「見せる下着」に関する分析である。下着や身体の一部を露出する被服は、通常、羞恥心によって抑制されるが、若い女性たちを中心に、そうした感覚を持たないケースが増えている。規範意識の欠如などとして批判的に論じられることも多いが、「露出」に対する社会的意味づけが特殊なだけであり、彼女たちも、一定の羞恥の基準に基づいて行動していることが示された。

みっつめは、年齢との関連性である。下着による心理的効用感は、年齢によって大きく変動するが、単に実年齢だけでなく、主観的な年齢意識や容姿の加齢変化に対する態度の違いによっても、身体観や生活価値観などに違いが見られ、それが下着や衣服に対する行動に多様な影響を与えていることが見出された。

◆講師のプロフィール

特別講演の講師をお願いしました菅原健介氏は、現在、聖心女子大学文学部歴史社会学科人間関係専攻の教授でいらっしゃいます。氏は、横浜国立大学教育学部心理学科を卒業された後、東京都立大学大学院人文科学研究科博士課程心理学専攻を修了され文学博士を取得されました。専門は社会心理学、性格心理学で、失態場面で覚える「羞恥」や、人前でスピーチするときの「あがり」などに関心を持っていらっしゃるとのことです。

ご著書には、「羞恥心はどこへ消えた？」、「下着の社会心理学」、「人はなぜ恥ずかしがるのか－羞恥と自己イメージの社会心理学」などがあります。

5．アクセス・宿泊

① JR東日本　中央線「日野」駅下車
徒歩約15分
東京→日野　特別快速で46分、快速で60分
新宿→日野　特別快速で28分、快速で42分

② 京王線　「高幡不動」駅下車　高幡不動駅よりバス。 高幡不動駅２番乗り場　日03系統「実践女子短大」バス停下車　徒歩約10分

③ 宿泊：JR日野駅近くにホテルはあまりありません。ひとつ東京よりの立川で探されることをお勧めいたします。立川にはたくさんホテルがあり、立川→日野はJRで1駅3分です。あるいは、早くても30分かかりますが、新宿のホテルを利用するかどちらかと思います。

6．連絡先

服飾文化学会　第12回総・大会実行委員会
〒191-8510　東京都日野市大坂上4-1-1
Tel.&Fax：042-585-8901
実践女子大学　生活科学部　生活環境学科
担当：高部啓子（takabu-hiroko@jissen.ac.jp）

博士論文「陣羽織の素材と技法に関する科学的分析と染織史的研究」とその後の研究活動

深津　裕子

博士論文では、陣羽織が日本の服飾史上極めて特徴的な武家の服飾であったことを、服飾史学的な分析と、素材と製作技法の科学的な分析結果の技法書との照合から明らかにした。そして染織文化財の形態変遷、製作技術、歴史的背景の考察を総合することにより、製作年代等を再検証するとともに服飾文化の新しい研究手法を示した。本研究には、服飾史・技法史・保存科学という異なる３領域からのアプローチによる「異分野横断型」の研究が必要であったことから、家政学における被服学領域での研究が適していると考えられた。共立女子大学大学院家政学研究科で齊藤昌子教授（被服管理学）、伊藤紀之教授（被服意匠学）、長崎巌教授（服飾文化）の各専門分野からの指導を賜り、自らの専門分野である染織技法史と併せて総合的な見解を得られたことは、博士論文に取り組んだ中での一番の収穫であった。服飾史領域でこれまで漠然と類推されてきた素材・技法の特徴や産地・製作年代を、自然科学的調査による分析結果と染織技法書などを照合しながら再検証することにより、新たな知見を見出すことができた。研究対象とした陣羽織の大半は現在、愛知県一宮市博物館が所蔵する「墨コレクション」の一部となり、近日公開されるという。研究成果が公開の一助となったことは大変喜ばしい。

博士論文取得後は、染織品の学術研究・保存修復・教育活動に様々な側面から取り組んできた。『タペストリーの保存研究―石橋財団所蔵≪ヨセフ物語≫―』では、16世紀後半にフランドル地方で製作されたタピスリーの保存修復を行う上での総合的な作品研究を行った（タピスリー保存研究プロジェクト実行委員会編、pp.29-66、2008年）。また無形文化財における染織技術の記録と保存および保護への取り組みを、葛布の製作技法を事例として行った（平成20年度ポーラ美術振興財団研究助成「染織工芸技術の保存と復元に関する研究―葛布製道中着を事例として―」『無形文化遺産報告３』東京文化財研究所pp.61-74、2009年）。大学教育では多摩美術大学において熱帯地方で大量廃棄されているバナナの皮を再利用するシステムの構築をめざした「バナナテキスタイルプロジェクト」に関わり環境問題と大学デザイン教育を通じた未利用繊維と染織技術の新たな活用と教育普及に取り組んだ。加えてアメリカの美術館での染織品保存業務に携わった経験を踏まえ、国内外における染織品保存修復家の育成にも協力してきた。

現在は女子美術大学美術館の学芸員として収集保存・調査研究・展示公開・教育普及に努めている。女子美染織コレクション12,000点には古代から現代までの多岐に渡る染織品が含まれ、2009年度に新規収蔵した旧カネボウコレクション染織品11,734点に対しては調査研究と資料の公開が求められている。そのため、学芸業務としてはミュージアム・ドキュメンテーションの作成、収蔵品の画像による記録、学術研究、教育普及を行い、保存業務としてはIPMをはじめとする収蔵環境の整備、保存処置を行い、研究システムの体系化と教育活用への準備を進めている。一般の博物館の所蔵品は、ある特定のテーマに則った資料を個別的あるいは網羅的に収集して形成されるが、大学付属美術館の所蔵品は、学問体系に則って収集された学術資源的なものが主体であるため、一般公開のみならず所蔵品を活用した教育普及が重要な役割を果たす。そのため女子美染織コレクションを将来のアーティスト・デザイナー・研究者となる学生および一般社会人に向けてグローバルに開かれたものにしていけるよう、学内外での公開に取り組んでいる。最近スタッフと共に取り組んでいる試みとして「服飾文化と着装形態の再現プロジェクト」がある。所蔵品自体は経年劣化により展示すら困難なものも多いが、学術研究を基盤にその材質感・意匠・色彩のコンピュータ・グラフィックスによる再生、形態の再構築を行い、二次的資料として展示および教育に活用するという試みである。研究成果は本学会においても随時発表していく予定である。

2010（平成22）年度 論文発表会の報告

会場風景

本年度の論文発表会は2011年３月７日（月）午後１時30分より、お茶の水女子大学本館306室において開催された。当日は、季節はずれの雪が降りしきる悪天候にもかかわらず、100余名の参加となり、これまでにない大盛況となった。

卒業論文の発表は８件、修士論文の発表は２件の計10件による発表で、うち３件が実物製作を伴う研究発表であった。以下がプログラムである。

プログラム

卒業論文

（座長　長崎巌）

１．津軽こぎん　－その発展と衰退の背景－
日本女子大学　青木智美

（座長　荻原延元）

２．舞妓と芸妓の服装
－その歴史的変遷と地域性に関する考察－
共立女子大学　櫻木英里子

（座長　大網美代子）

３．アルフォンス・ミュシャの作品からのデザイン発想　－実物製作－
文化女子大学　小柳百合奈

４．ブラジャー着用の効果
実践女子大学　春日愛美

（座長　塚田耕一）

５．浮世絵春画の服飾表現に関する研究
－ファッションとの関連性を中心に－
共立女子大学　牛村仁美

（座長　高部啓子）

６．タティングレースで描く赤ずきんの世界
－実物製作－
文化女子大学　友部直美

７．小柄な若年女子の体型に適合するジャケット
文化女子大学　上田みゆき

（座長　徳井淑子）

８．イサドラ・ダンカン研究
杉野服飾大学　杉下仁美

修士論文

（座長　能澤慧子）

９．服飾描写からみたベル・エポック
－プルーストとコレットの作品を通して－
お茶の水女子大学　神岡恵実

（座長　小笠原小枝）

10.「幕　白綸子地檜垣牡丹模様小袖裂」に関する研究
共立女子大学　鈴木理子

発表後の質疑応答の様子

青木論文は農民衣装であった津軽こぎんについて、仕事着を始まりとする津軽こぎんが晴れ着として着られるようになり、衰退後伝統工芸として受け継がれていくことになった現在に至る状況を文献調査と実地調査の双方の視点から発表した。その背景に近代化と衣生活の変化による影響があったことを指摘した。

櫻木論文は舞妓と芸妓の服装について京都と東京（芸者・半玉）の違いを比較した。帯や着装の違いは地域性、社会性が伴い、また、遊女の存在も大きく影響を及ぼしていたことが明らかになった。

小柳論文はアルフォンス・ミュシャの作品をもとにその色彩表現に着目し、色彩から得られる心理的効果をデザイン発想に繋げてワンピースドレスを製作するというユニークな発表であった。

春日論文はブラジャーのワイヤーによる着用効果についてアンケートと着用実験による報告をした。ブラジャー購入者が着用効果に対して機能面と心理面の双方をあげ、そのためには試着することが重要であることを指摘した。

牛村論文は浮世絵春画に描かれた服飾表現について、性的表現としての衣装・布の描写に当時の流行衣装が表現されていることを指摘した。春画におけるファッションが日常的生活の表現の演出として用いられたという興味深い見解を示した。

友部論文は、タティングレースの技法を用いたストールの実物製作に基づいた発表であった。一般的に単一モチーフを扱う場合が多い中で、実作では「赤ずきん」をテーマに多数のモチーフを取り入れ、表現の広がりの可能性を見出した。

上田論文は、既製服サイズに適合できない小柄な体型の若年女子を対象にしたジャケット製作に基づいた発表であった。ラペルやボタン位置を9ARサイズの割合に近づけることで小柄な9APでもバランスの良いジャケットができるという結果を得た。

杉下論文はモダンダンスのパイオニアであるイサドラ・ダンカンについて、「身体」「音楽」「衣装」を焦点に当て発表した。その3点は相互に1つの法悦へと向かうものであり、また当時の通俗的な女性美に対する1つの態度を示すものであったという知見を報告した。

8編の卒業論文の発表を終えて休憩を挟み、修士論文2編の発表へ移った。

神岡論文はベル・エポック期のフランスの作家、プルーストとコレットを取り上げ、作品における服飾描写から時代に対する感情を読み取っていった。結論としてプルーストには客観的な「時」が、コレットには主観的な「時」が表わされていることを明らかにした。

鈴木論文は小袖から仕立て替えされた「幕」を対象に実物調査と科学分析による発表を行なった。結果として素材、加飾技法、染料、史料の状態が詳細に明らかにされ、小袖の制作年代が江戸時代18ｃ末〜19ｃ、幕の制作年代は19ｃ初期以降であるという推定年代を明らかにした。

各発表では活発な質疑応答や講評がされ、会場の関心の高さが伺え、その後の懇親会の場でも発表者との懇談が続いた。

発表者にとっては他大学の学生、教員が大勢いる中で緊張したことであったろう。また参加者にとっても他大学の研究発表を聴くことで、新鮮で多彩な研究テーマに刺激を得た者も少なくなかっただろう。懇親会での発表者の緊張から解かれた安堵の表情が印象的であった。

（論文発表会担当　塚田耕一）

2010（平成22）年度 研究例会の報告

日時：2010年11月27日（土）14：00〜16：30
会場：文化女子大学新都心キャンパスＡ館５階　A056 服装史学演習室

今年度は新進気鋭の研究者,朝倉三枝氏と菊田琢也氏から、以下のような最新の研究成果をうかがいました。

ソニア・ドローネー　服飾芸術の誕生

朝倉　三枝（日本学術振興会特別研究員）

フランスで活躍したロシア出身の画家ソニア・ドローネー（1885-1979）は、1910年から20年代に衣服制作を行い、モードの世界で活躍をした。本発表は、彼女自身が「服飾芸術」と呼んでいたその試みが、絵画をはじめとする諸芸術と結びつき展開されていく過程をたどりながら、芸術とモードが錯綜した20世紀初頭という時代の中で、この芸術家が成したものを改めて問い直すものである。考察に際し、本発表は拙書『ソニア・ドローネー　服飾芸術の誕生』（ブリュッケ、2010年）に基づき、以下の４点に注目した。

最初に1913年に初めて制作された衣服、「ローブ・シミュルタネ（同時的ドレス）」を取り上げ、ソニアがその夫で画家のロベール・ドローネーが提唱した芸術論「シミュルタニスム（同時主義）」の概念を、カンヴァスの内と外に垣根を持たない自由な制作活動において実践する中、衣服制作に及んだことを検証した。続いて1920年代初頭に制作された「ローブ・ポエム（詩＝ドレス）」に着目し、トリスタン・ツァラやフィリップ・スーポーなど、前衛詩人の詩に飾られたこの衣服が、詩人たちとの交流、そして文字造形への関心とが重なり創作された経緯を明らかにした。続いて本発表は1924年のサロン・ドートンヌと、翌1925年にパリで開催されたアール・デコ博覧会にソニアがそれぞれ出展したブティックの展示方法に注目し、衣服制作の対象をより広範な人々に向けるようになった彼女が、そこでどのような展示を行うことでパリのモード界への進出を果たしたかを論じた。そして、1924年のサロン・ドートンヌで行われたテキスタイルの動く展示が映画や衣服と共に自由に揺れ動く女性の身体イメージを喚起させるものであったこと、さらにこの頃から手がけるようになった幾何学模様のテキスタイルと共に、ソニアが新しい女性身体の創成を試みていたことを指摘した。最後に1927年にパリの高級メゾン「レッドファン」と共同で販売した既製服「ティッシュ・パトロン（型紙＝布）」と、1931年に行われたアンケート記事「芸術家と未来のモード」を取り上げ、1920年代という時代に早くも1960年代以降に実現されるモードの大衆化の到来を見越していたソニアの先見性を論じた。

以上の考察から、ソニアの衣服制作というものが、シミュルタニスムをはじめ、キュビスムや未来派、オルフェウ、ウルトライスモ、ダダイスムなど、同時代の芸術家たちとソニアが相互に影響を与え合い、時に共同制作という形を取りながら実現されたものであったことが明らかとなった。また、ソニアの衣服制作は、幾何学模様をはじめ、衣服への文字の導入や女性の身体と衣服の関係性、さらにはモードの大衆化など、同時代のクチュリエたちもまだ思い描いていなかった新しい価値観を提示するものであったことを知ることとなった。絵を描いていたソニアが、1913年に初めて自分の絵画作品と一致する衣服を手がけて以降、その試みは、絵画にはじまり、詩や広告、室内装飾、舞踊、写真、映画など、多様な事象と結びつきながら展開された。このような諸芸術の間の垣根を取り払うかの自由な制作活動を展開し、同時代の芸術家やクチュリエたちに少なからぬ影響を与えたソニア・ドローネーは、画家、あるいはクチュリエという限定された呼称にはとどまらない、自由な芸術家としての立場を1910年代から20年代という時代に築いたと言えるだろう。

ジャパン・ファッションにおける「日本的なもの」－コム デ ギャルソンを中心に－

菊田　琢也（文化女子大学非常勤講師）

「着物」から「ゴスロリ」に至るまで、ジャパン・ファッションに対する関心は大きく移り変わっているが、それらはとかく「日本」の歴史や文化との関連において論じられる。しかし、グローバル化の促進とともに文化的アイデンティティの境界が不鮮明なものになっている後期近代社会において、「ナショナリティ」とは１つの固定化された概念ではなく、複数の国籍と文化的要素が領域を越えて交錯するなかで創出されるものとして理解する必要がある。

こうした問題を踏まえ、本発表では、1980年代初期の『アメリカ版ヴォーグ』（以下『ヴォーグ』）におけるコム デ ギャルソンの位置付けということに注目することで、ジャパン・ファッションにおける「日本的なもの」の様相について説明することを試みた。コム デ ギャルソンとそのデザイナー川久保玲は、1980年代初期にパリで発表した「黒」を基調とする一連の作品を通してファッション史にこれまでなかった新しい価値観をもたらしたとされ、欧米おける日本人デザイナーに対する関心を異国情緒的なものから前衛的な表現へと変化させる要因となった。

アメリカの服飾史家ハロルド・コーダは、1985年に「川久保玲と貧困の美学」という論文を『DRESS』11号のなかで発表している。コーダの論点は、当時の『ヴォーグ』に掲載されたコム デ ギャルソンの衣服に見られる「切り放し」や「穴空き」といった意匠に寄せられた読者の反感といったものを、川久保玲の服作りの背景に「貧困の美学」＝「日本的美学」を見出すことで回収しようとするものである。しかし、当時の『ヴォーグ』というメディア空間に即して分析するならば、誌面上においてコム デ ギャルソンは、「日本」の伝統性というよりも、むしろ『ヴォーグ』が作り出そうとする「新しい女性のイメージ」との関連のなかで取り上げられていたことが指摘できる。

1980年代初期の『ヴォーグ』の誌面上には、女性の社会進出やフェミニズム運動に伴って、都会で働くワーキング・ウーマンに向けたスーツやシャツスタイルの記事や、「シェイプアップ」や「運動」、「スキンケア」などの身体管理の記事を通して「力強い女性イメージ」を発信しようとする姿勢が窺える。それらの記事と並列して「新しく、力強い、真っ直ぐな」や「ドラマティックで、最も挑発的な！」といった修辞句によってコム デ ギャルソンも紹介されており、この点に即して言うならば、『ヴォーグ』におけるコム デ ギャルソンはコーダが指摘するようには「日本的なもの」とは結び付いていない。

また、「ファッション頁」を中心に分析すると、パリ・コレクションを中心に構成した特集と、ニューヨーク・コレクションを中心に構成した特集とに二分されていた。それらは「理想」としてのイメージと、より「現実」的なスタイルとして捉えることができよう。その際、「自由奔放な」や「壮大で開放的な」として紹介されるコム デ ギャルソンを含むジャパン・ファッションは、「理想」とも「現実」とも異なる第３のイメージとして読者に届けられるのである。この点に即して言うならば、ジャパン・ファッションにおける「日本的なもの」は、パリやニューヨークといった複数の国籍や文化的要素との交錯のなかで、「自由」や「開放」のイメージとして創出される表象としてのナショナリティとして理解される。

今回の発表は、1980年代初期の『アメリカ版ヴォーグ』に限った分析であるかもしれない。しかし、その限定された時間・空間においても、１つのイメージはそのメディア空間に即したものとして表象されている様子をはっきりと確認することができる。ファッション・デザイナーを対象とする研究は、とかくデザイナーを中心とする生産的側面にのみ注目しがちであるが、それらが表象・受容される空間という消費的側面に対し、もう少し慎重になる必要があるのではないだろうか。

2011年度夏期セミナーのお知らせ

国内最大の絹織物産地、丹後地方を訪れ、ちりめんの製造をはじめ、幻の古代布といわれる藤織り見学などを予定しています。総会・大会時に、ご案内、申込み用紙などを配布いたします。

日程：2011年8月3日（水）～5日（金）

第1日・丹後織物ガイダンス、懇親会

第2日・京丹後市峰山町 禅定寺［伝承の織り初めちりめん見学］・同市網野町　田勇機業［ちりめん製造の見学、解説］・宮津市国分［丹後郷土資料館の見学］・宮津市上世屋［藤織り伝承交流館の見学、解説］

第3日・与謝野町加悦［ちりめん街道・尾藤家住宅見学］・天橋立自由散策

＊＊＊＊＊事務局より＊＊＊＊＊

●会費納入のお願い

今号に2011（平成23）年度　服飾文化学会費（正会員6千円、学生会員3千円）の払込用紙を同封しました。5月末日迄にお振込み下さい。過年度未納の方も、ご確認の上お振込みをよろしくお願い致します。

●会員の異動

★入会者（2010年10月～）※敬称略・五十音順

正会員

青　谷　徳　子（女子美術大学）
石　井　美　恵（女子美術大学美術館）
軽　部　幸　恵（杉野服飾大学）
佐々木　千　加（Seoul National University）
鈴　木　由　子（東京家政大学）
富　川　淳　子（跡見学園女子大学）
永　島　朋　子（専修大学）
三　塚　由美子（聖和学園短期大学）

海外会員

田　中　　瑛（University of Toronto）

定期購読会員

福　永　耕　人（関西大学）

★退会者

斎　藤　祥　子（2010年12月）
井　手　正　代（2010年度末）
斉　藤　秀　子（2010年度末）

●謹んでお見舞い申し上げます

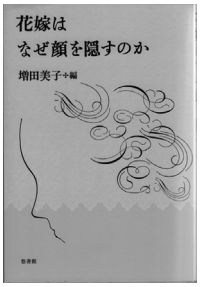
この度の東北関東大震災により、多くの被害を受けられた被災地域の皆様に、心よりお見舞いを申し上げます。

＊＊＊＊＊会員より＊＊＊＊＊

■著書の紹介

増田美子編『花嫁はなぜ顔をかくすのか』悠書館

2010年5月　B6版・324頁



2004―2006年の3年間の科学研究費助成金による共同研究「かぶりものの文化誌　―儀礼におけるかぶりものの意味―」の内容を更に発展させた成果をまとめたものである。執筆者は編者のほかに黒川裕子・内村理奈・諏訪原貴子・河島一惠（本学会員）。梅谷知世、大枝近子。

今も残る花嫁の角隠しやヴェールは、現代では深い意味は持たず、単なる儀礼、慣習として扱われる場合が多い。本書では日本、西洋、中東などを中心として、花嫁のかぶりものの起源、文化的背景、その後の変遷を詳細に述べ、それらの意味を探り、女性誌から女性史へと展開した点で、従来の花嫁衣裳史を超えている。（能澤慧子）

■展覧会

着物文化の美と装い「江戸KIMONOアート」展

大阪髙島屋7階（3月31日～4月11日）
日本橋髙島屋8階（4月27日～5月9日）
横浜髙島屋8階（9月22日～10月3日）

髙島屋創業180周年記念事業の一環として開催。女子美染織コレクションの小袖、髙島屋資料館の能装束ほかを展示。

会報　№21：2011(平成23)年3月31日発行
編集発行人：服 飾 文 化 学 会
事務局：101-8437 東京都千代田区一ツ橋2-2-1
共立女子大学 被服意匠研究室
TEL,FAX;03-3237-2496
E-mail;isho@kyoritsu-wu.ac.jp
URL;http://www.fukushoku-bunka-gakkai.jp